

国立民族学博物館の収蔵品⑬

# メンドンはメンドン

新構築を終えた日本展示場にお目見えした資料に「メンドン」がある。萱の葺の胴に乗った渦巻模様の丸い大きな耳、格子縞の大きな鼻、団扇型の眉、瓢箪型の目、球形の頬の瘤、眉間の一本角の顔貌は、一見日本離れしていて展示場で異彩を放っている。

薩摩半島の南西約四〇キロに、人口一三〇人ほどの鹿児島県三島村硫黄島がある。メンドンは、この島の旧暦八月一日・二日の熊野神社の祭りで演じられる、「八朔太鼓踊り」の際に現れる。祭りでは、夕刻、神社前の広場に薄縁を敷いて設えた宴席に島の人々が集まってくる。宴が始まってしばらくすると、八朔太鼓踊りが始まる。踊り手たちがひとしきり踊った後、いよいよメンドンが登場する。「一番メン」のメンドンを皮切りに、メンドンがいくつも神社の境内から広場に駆けだしてくる。メンドンには島の男性たちが扮する。かつてメendonは、「コニセ」と呼ばれる若い男性の集団が演じていた。島の男の子はコニセに加わる年齢になると、メンドンの仮面を持参して仲間に加わった。まだコニセに加われない子供は、手製の簡易な仮面を被ってメendonに扮していた。今も踊りの際は子供たちのメendonが登場する。



日本展示場のメンドン

は昼夜を問わず集落内を走り回り、若い女性がいる家では堅く戸締まりをしてメendonを入れないようにしていたし、若い女性は踊りを見に来ることができなかった。そんなメendonとは一体何者か。ふと疑問が湧いて島のの人に尋ねると、「メendonはメendon」との答が返ってきた。

ある年、島から鹿児島に戻る船中で島の人に呼び止められた。その人は、「メendonは神様みたいなもん」で、誰がメendonになるかは秘せられる。だから、メendonに扮する様子の撮影を遠慮してほしかったというのである。確かに、メendonに扮したのが誰か悟られないように履物や衣裳を交換したりしていた。メendonは、祭りの間はどんなに暴れても「天下御免」で許される。メendonに絡まれるのは厄祓いになり、メendonは祭りの最後に、踊り手と共に集落中を巡って依り付けた悪霊を海の彼方に追い払う「タタキダシ」を行う。こうしたことは、島の人々にとって「メendonはメendon」、即ちメendonは、人智を越えた、人々の思い通りにはならない一方で、人々に福を授ける存在という、一言では定義できない現実のありようのまままで理解され、崇められてきたことを示している。

先頃メendonは、国の文化財に指定されることになった。祭りや八朔太鼓踊りとは切り離されたメendonのみの指定は、メendonが島の人々と縁遠くなるようで違和感を覚えないでもない。しかし、島の人々にとっては、新たな意味が加わり更に一言では定義できなくなっても、現実のままの「メendonはメendon」で変わりはないのかもしれない。(笹原亮二)



八朔太鼓踊りの見物人とメendon